

海外短期派遣を通じた

日本人学生のグローバル化効果と実施上の課題

—国際環境事例研究に参加した大学院生及び指導教員の調査結果から—

佐藤 由利子

はじめに

経済のグローバル化、少子高齢化による国内市場縮小による日本企業の海外展開などを背景として、グローバル人材の育成は日本の最優先課題の1つとなっている。グローバル人材育成を求める世論が高まるきっかけは、「日本人の若者の内向き志向」の指摘であった。UNESCO (2012) によると、2010年の日本の留学生送出しは40,487人、海外留学比率(OMR: Outbound Mobility Ratio、海外留学者数を高等教育在籍者数で除して算出)は1.1%であり、韓国の留学生送出し126,447人、OMR3.9%と比べると3分の1以下である。日本人学生の海外留学促進がグローバル人材育成の焦点の1つとなっており、安倍政権が2013年に発表した「日本再興戦略」(首相官邸, 2013: 37)では「グローバル化等に対応する人材力の強化」のため2020年までに日本人留学生を12万人に増加する目標を掲げている。

海外短期派遣は、日本人学生をグローバル人材に養成するステップとして、政府が力を入れている施策である。2011年度には、文部科学省が所管し、日本学生支援機構(JASSO)が実施する高等教育レベルの留学生交流支援制度において、従来の760人の海外短期派遣(3ヶ月以上1年未満)支援予算に加え、7,000人の「ショートビジット」(3ヶ月未満の海外短期派遣)支援予算が新規に認められ、2012年度には、「ショートビジット」が6,300人分に減額されたものの、海外短期派遣(3ヶ月以上1年未満)は2,280人と3倍になり、さらに2013年度には、2つのカテゴリーを一体化して、8日以上1年以内の海外短期派遣に1万人の支援予算30億9千万円が計上され、支援対象も日本人学生に限定されることとなった。高等教育機関においては、これらの海外派遣支援制度を有効活用しながら、日本人学生の内向き志向を打破し、グローバル人材を養成していくことが期待されている。

グローバル人材の概念については、グローバル人材推進育成会議(2012: 8)が、「語学力・コミュニケーション能力」「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」の3要素を含むとし、さらに社会の中核を支える人材に共通して求められる資質として「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等」を挙げ

ている。

日本人学生の海外留学志向と支援策については、京都大学の近森(2006)、蘭(2006)が、アンケート調査結果に基づき、日本人学生を、積極派、消極派、浮動層の3層に分類し、学生のニーズに応じた留学支援体制として、①海外留学経験者や留学生と一般日本人学生との交流促進、②留学情報が簡単に集められるシステム、③積極派には意思を阻害しない手段的サポート、④消極派には留学を魅力的にする情報提供と制度的手段の提示、⑤浮動層にはわかりやすく利用しやすく制度化された「短期留学プログラム」の提示が効果的であると分析している。埼玉大学の中本・比奈地(2006)は、ハーバード大学における国際プログラムを分析した上で、学生の多様なニーズに応え得る弾力的な教育体制を構築するため、派遣・招聘の両面においてIndependent Study(自由研究)を単位化する試みを遂行すべきことを提案している。また、東京外国語大学の岡田(2012)は、同大学におけるショートビジットプログラムの概要と、学生によるプログラム評価結果を紹介している。しかし、海外短期派遣が、理系の日本人大学院生のグローバル化に及ぼした影響についての実証的研究は少ない。

本稿では、筆者が協力講座教員として所属する、東京工業大学大学院総合理工学研究科環境理工学創造専攻における「国際環境事例研究」という海外でのIndependent Studyを中心とする教育プログラムについて、参加した日本人大学院生に対するオンライン調査と指導教員への調査結果から、海外短期派遣が日本人学生に与えた効果、専攻にもたらした影響と実施上の課題を分析し、理系の大学院教育における海外短期派遣を通じた国際化に関して示唆を得ることを目的とする。

1. 環境理工学創造専攻における「国際環境事例研究」導入の経緯と概要

環境理工学創造専攻は、1998年に、環境物理工学専攻を発展的に改組して設立された、東京工業大学では比較的新しい専攻である。教員は、基幹講座12名、協力講座9名、併任1名、さらに国立の研究所等から9名の連携講座教員を得て構成されており、水環境、環境計画・政策、エネルギー・物質循環、都市環境の4分野で研究・教育活動を行っている。2014年1月時点で、修士課程に107名、博士課程に51名の学生が在籍している。

環境理工学創造専攻では、2010年に将来構想を議論する中で、アジア諸国の大学・研究機関等との共同研究を推進して留学生を積極的に受け入れ、文系も含めて国際志向の強い日本人学生を集め、国際的に活躍できる人材を養成していく計画が作成された。この国際化計画の根拠となったのは、第4期科学技術基本政策(2011～2015年度)のⅢ.「我が国が直面する重要課題への対応」の5.「世界の活力と一体化する国際展開」に述べられた「環境、エネルギー、防災など、アジア共通の課題解決に向け

た研究開発の推進」と、産業界における国際的人材の必要性である。産業界の国際的人材のニーズについては、2011年度の新卒採用において、パナソニックでグローバル採用枠が1,390人中1,100人と発表されたこと、楽天、ユニクロなど、グローバルなビジネス展開を目指す企業で「社内英語公用化」が導入された状況を分析し、日本企業の国際化が急速に進む中で、留学生の就職機会が増加する一方、英語が不得意で国内志向の日本人学生の就職が厳しくなり、「国際化」のトレーニングを受けられることが進学先決定上の重要なファクターとなると予測している。この将来計画に基づき、2011年度には、「環境問題解決のための深い洞察力と具体的な環境政策立案能力を併せ持ち、国際社会で活躍できる総合的環境専門家の養成」が、専攻の教育目標として掲げられた。

上記計画及び目標を具体化した教育プログラムの1つとして、2011年度に、海外短期派遣による Independent Study を主体とする「国際環境事例研究」という科目が開始された。この科目は、各国が抱える環境問題に特化した研究を学生に体験させることで、国際的に活躍できる環境リーダーを育成することを目的としており、指導教員が、海外協定校等において受け入れ先をアレンジし、研究や調査を行わせ、帰国後は、英語による体験発表とレポートの提出を行わせ、それに基づき成績を判定し、合格者に2単位を付与するものである。専攻の教員の多くが海外、特に途上国の研究者との共同研究の経験を有し、学生の派遣や受入の実績があったことが、本科目の開講を容易にした背景にある。

2011年度は22名のJASSO ショートビジット奨学金（月額8万円）を獲得し、同数の学生が海外に短期派遣された。内訳は修士学生10名、博士学生12名、また、日本人学生10名、留学生12名である。同年は、ショートステイという短期留学受け入れのためのJASSO 奨学金も獲得して16名の留学生を受け入れ、双方向の学生交流が実現した。初年度の国際環境事例研究は、体験発表会や後述のオンライン調査結果などを通じて、大きな教育効果が認められた。

2012年度には、上記の教育効果を受け、国際環境事例研究を修士課程（国際大学院プログラムを除く）の必修科目とすることとなった。49名が海外派遣され、内、JASSO 奨学金受給者は37名であった。45名が修士学生（主に1年生）で、博士学生は4名、40名が日本人学生、留学生は9名であった。

2013年度には46名が派遣され、内、JASSO 奨学金受給者は21名、45名が修士学生（主に1年生）、博士学生は1名、42名が日本人学生で、留学生は4名であった。

また、2012年度からは、上記国際化計画を受けて授業の英語化が進められ、基幹・協力教員が担当する専門科目中の英語教授科目の割合は、2010年度に28科目中8科目（28.6%）であったのに対し、2013年度は29科目のすべてが英語で提供されている。さらに修士論文発表会も、2012年度からすべて英語で行われるようになった。

このような教育の国際化の効果として留学生も増加している。2010年5月時点の留学生割合は、修士学生92名中15名(16.3%)、博士学生52名中22名(42.3%)であったのに対し、2013年5月時点では、修士学生92名中18名(19.6%)、博士学生51名中33名(64.7%)に増加し、さらに2013年10月に、修士課程に19名、博士課程に9名の留学生が入学し、2014年1月時点で、修士学生107名中32名(29.9%)、博士学生51名中35名(68.6%)が留学生である。その出身国も中国、韓国、インドネシア、タイ、スリランカ、ベトナム、タンザニア、アルジェリア、ルーマニア、タジキスタン、トルコ、カナダ、ペルーと多岐にわたる。日本人学生にとって、授業や研究活動を通じて、多様な国からの留学生と交流する機会が増加している。

2. 日本人学生に対する調査結果

国際環境事例研究実施による教育効果を測定し、改善の必要な事項を把握するため、2011年度より学生に対するオンライン調査を実施している。質問項目は、国際環境事例研究開始前の2011年8月に、海外派遣予定の5名の学生に対して、参加動機、海外派遣に期待する事項に関するヒアリングを行って決定した。

(1) オンライン調査結果

日本人学生の回答者と回答率は、2011年度10人(100%)、2012年度23名(57.5%)、2013年度37名(88.1%)で、回答者の合計は70名である。2012年度は11月に調査を実施し、その時点で派遣前の学生は回答していないため、回答率が低くなっている。

派遣先(有効回答中)はアジアが最も多く44名に上り(内訳:中国13名、インドネシア11名、韓国6名、タイ6名、シンガポール3名、台湾3名、カンボジア2)、次いで欧州の12名(イギリス4名、ドイツ2名、スウェーデン2名、イタリア1名、フランス1名、ポルトガル1名、スイス1名)、中東(トルコ2名)、北米(米国1名)の順である。

派遣期間(有効回答中)は、1か月が24名と最も多く、2か月が8名、1か月半が7名、3週間で6名、2週間で5名、1週間で4名、2か月半が3名、3か月が1名である。1週間の派遣は、後述する2012年度の必修化後の議論を経て、2013年度から認められるようになった。

男女比(有効回答中)は、女性が7名、男性が53名、割合は、11.7%、88.3%である。

以下、主な質問項目別の3年間の集計結果を示す。

① 参加動機

| 回答選択肢 | 回答数 | 回答者割合 |
|-----------------------------------|-----|-------|
| ① その経験を自分の研究に役立てるため | 33 | 47.1% |
| ② 英語力を向上するため | 49 | 70.0% |
| ③ 訪問国の言語能力を向上するため | 0 | 0.0% |
| ④ 国際的視野を広げるため | 52 | 74.3% |
| ⑤ 人的ネットワークを広げるため | 6 | 8.6% |
| ⑥ 異文化理解を深めるため | 35 | 50.0% |
| ⑦ 海外で異なる文化背景の人たちと仕事をする経験を積むため | 13 | 18.6% |
| ⑧ より長期の海外滞在（留学／海外インターンシップ等）の準備のため | 3 | 4.3% |
| ⑨ 先生に勧められたから | 6 | 8.6% |
| ⑩ 先輩／友人に勧められたから | 2 | 2.9% |
| 有効回答者数 | 70 | |

表1に示すように、参加動機について「国際的視野を広げるため」と答えた者が74%と最も多く、次いで、「英語力の向上」（70%）、「異文化理解の深化」（50%）、「研究に役立てるため」（47%）の順である。また、「その他」の理由に、「必須科目だから」と回答した者が、2012年度に5名、2013年度に2名いた。

2013年度の回答を分析すると、「国際的視野を広げるため」は80.6%、「英語力を向上するため」は72.2%と、回答者割合が増加している。専攻における国際環境事例研究の実践が周知され、それを目指して入学した学生が増えたこと、企業のグローバル人材ニーズが報道され、就職活動の際のアピールも視野に入れ、国際的視野の拡大や英語力の向上を目指す学生が増えたことなどが、背景にあると考えられる。

② 参加してよかった点

| 回答選択肢 | 回答数 | 回答者割合 |
|------------------------------------|-----|-------|
| ① その経験を自分の研究に役立てることができた | 21 | 30.0% |
| ② 英語力を向上することができた | 29 | 41.4% |
| ③ 訪問国の言語能力を向上することができた | 5 | 7.1% |
| ④ 国際的視野を広げることができた | 44 | 62.9% |
| ⑤ 人的ネットワークを広げることができた | 25 | 35.7% |
| ⑥ 異文化理解を深めることができた | 41 | 58.6% |
| ⑦ 海外で異なる文化背景の人たちと仕事をする経験を積むことができた | 15 | 21.4% |
| ⑧ より長期の海外滞在（留学／海外インターンシップ等）の準備ができた | 2 | 2.9% |
| ⑨ 日本を海外から見て、日本理解が深まった | 11 | 15.7% |
| ⑩ 更なる国際的活動参加への動機付けが高まった | 11 | 15.7% |
| 有効回答者数 | 70 | |

参加してよかった点として、「国際的視野の拡大」を挙げる者が最も多く63%に上り、次いで「異文化理解を深めることができた」（59%）「英語力を向上することができた」（41%）「人的ネットワークを拡大できた」（36%）「研究に役立った」（30%）の順である。異文化理解や人的ネットワークの拡大は、参加動機の回答に比べて回答

者割合が増加しており、期待以上にメリットが大きい項目だったと考えられる。

外国人（自分の国籍以外）の友人の数を聞いたところ、派遣前の平均 10.2 人から、派遣後は平均 20.5 人に倍増しており、人的ネットワークの拡大を裏付ける結果となった。

③ 期待通りでなかった点

| 回答選択肢 | 回答数 | 回答者割合 |
|---|-----|-------|
| ① 期待したほど、その経験を自分の研究に役立てることができなかった | 25 | 35.7% |
| ② 期待したほど、英語力を向上することができなかった | 40 | 57.1% |
| ③ 期待したほど、訪問国の言語能力を向上することができなかった | 28 | 40.0% |
| ④ 期待したほど、国際的視野を広げることができなかった | 3 | 4.3% |
| ⑤ 期待したほど、人的ネットワークを広げることができなかった | 12 | 17.1% |
| ⑥ 期待したほど、異文化理解を深めることができなかった | 1 | 1.4% |
| ⑦ 期待したほど、海外で異なる文化背景の人たちと仕事をする経験を積むことができなかった | 12 | 17.1% |
| ⑧ 期待したほど、より長期の海外滞在（留学／海外インターンシップ等）の準備がなかった | 11 | 15.7% |
| ⑨ 資金的支援が十分ではなかった | 25 | 35.7% |
| ⑩ 適切な住居が提供されなかった | 5 | 7.1% |
| ⑪ 受入れ大学の関係者との人間関係のこじれ | 1 | 1.4% |
| ⑫ 交通システム | 9 | 12.9% |
| 有効回答者数 | 70 | |

期待通りでなかった点／問題点としては、「期待したほど英語力を向上できなかった」と答えた者が 57% に上り、次いで「期待したほど訪問国の言語能力を向上できなかった」（40%）「資金的支援が十分ではなかった」（36%）「期待したほど、経験を研究に役立てられなかった」（36%）の順である。「期待したほど、人的ネットワークが拡大しなかった」「期待したほど、異なる文化背景の人たちと仕事をする経験を積みなかった」という回答も 17% に上り、訪問国の言語能力の伸長不足を感じる回答が多いのは、このように訪問先国の人たちとのネットワークや共同作業が思うようにできなかったことへの歯がゆさも背景にあると推察される。

また、これらの問題を解決するための提案を聞いたところ、下記のような回答があった。

<「期待したほど、英語力の向上ができなかった」を第一の問題と答えた 22 名の提案>

英語圏への留学（6 名）

留学期間を長くする（6 名）

自分の努力（7 名）：もっとリスニング力をつけてから留学する、良く話す、下準備が必要、より現地の学生と話すようにする、より英語力の高い学生との交流、もっと英語を使う、学生寮等 1 日中英語を話す環境に身を置く

その他（1 名）：英語の授業を設ける

<「資金的支援が不十分」を第一の問題と答えた 11 名の提案>

資金援助制度の確立と資金援助の増額、資金援助をもう少し増やして頂く、海外奨学金の増額、援助金の増額

支給額を増やす。条件として何か技能向上などを加えてみるのはいいかなと思います。

航空券代と宿泊費と食事代一日 1500 円を日数分支給する

必修科目なので専攻から全額支援して欲しかった。

必修にするからには専攻からも支援を、必修なのだから専攻からの資金的援助を増やす、選択科目に変更

<「訪問国の言葉の習得」を第一の問題と答えた 8 名の回答>

英語ではなく訪問国の言語を積極的に用いるべきであった

言語や文化など簡単な事前レポートを行う

事前に訪問国の言語について学習を行う、留学前に訪問国の母語を勉強する

研究活動には英語を用いるので仕方ないと思う

<「期待したほど経験を研究に役立てられなかった」を第一の問題と答えた 7 名の回答>

研究と絡める切り口よりも、異文化理解を重視したほうが勉強になると個人的には思います

自分の研究とある程度関係する研究室に配属される

所属する現地の研究室の情報を渡航する前に調べる

自分の研究とは別のものと割り切って考える

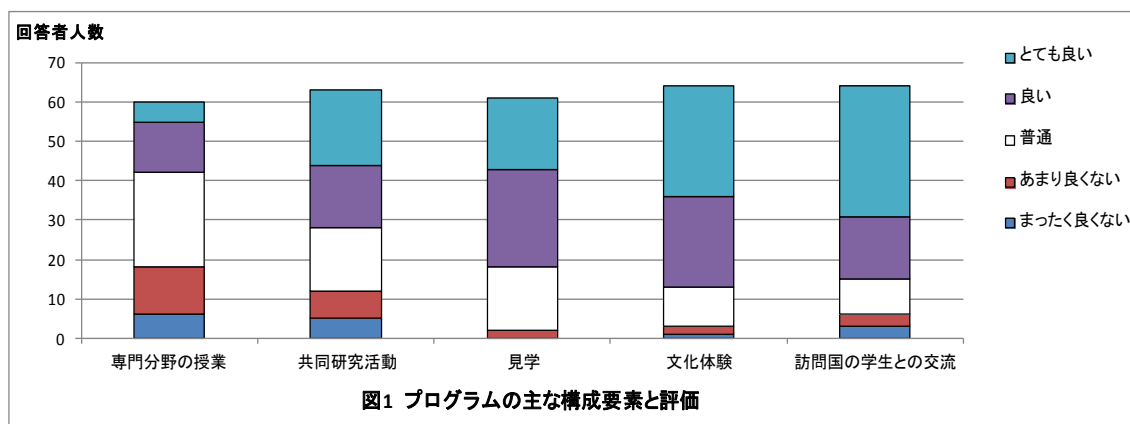
受け入れ先の大学や研究室が、自身の研究をできる環境にあるのかどうか確認が必要

授業参加等プログラムを充実させる

来年、再来年とよくなっていくと思います。

④ 海外派遣中の主なプログラムとその評価

図 1 は、海外派遣中の主なプログラムとその評価を示している。「とても良い」という回答が最も多いのが「訪問国の学生との交流」で、次いで「文化体験」「共同研究活動」「見学」の順であり、専門分野の授業の評価はあまり高くない。また、「その他の活動」には、「国際会議に出席し発表を行う」「現地調査（フィールドワーク）等の実施」「現地の研究者との情報交換」が挙げられ、これらの評価はいずれも「良い」であった。



共同研究活動のテーマは、2012年度の参加者では「加熱速度によるコンクリートの爆裂や内部の水蒸気圧の評価」「埋立処分場でのゴミ分類と浸出液調査」「バイオマスガス化炉に水蒸気発生装置を組み合わせた実験」「RC建築物の特徴と地震後の状況調査」「環境保護団体での参与観察」「カーシェアリングや自転車道の整備等の交通事情の実態調査」「Dynamic Earth Storage Systemの調査」「固体酸化物電気分解セルの作製」など多岐にわたる。研究・調査を通じて受け入れ先の関係者と密度の濃い関係が築かれることも多い。

「参加したプログラムで、大学以外の組織との連携が行われていたか？」という問いに「はい」と答えた者は、64名の有効回答中13名（20.3%）であった。その内容については、下記のように回答し、満足度が高いことが伺える。

実際に企業に訪問させていただいたのですが、ヒアリングをさせていただいたり、反対に日本の状況をできるだけお話したり、1時間とは言え濃密な時間をすごさせていただきました。課題としては、日本と違うことを念頭に置いていないので、なかなか日程のフィックスが難しかったことです。

現地の企業と共同研究を行った。仕事の経験を海外で出来る機会がめったにないのでとても良い経験になった。

⑤ プログラムの評価点とその理由

海外派遣プログラムについて10点満点で評価を聞いたところ、3年間の平均は7.00、年度別では、2011年度8.30、2012年度6.05、2013年度7.18であった。2011年度は、海外派遣を希望した学生のみを派遣しているのに対し、2012年度以降は必修科目となり、留学積極派のみならず、消極派を含めての派遣となったため、評価が下がったと考えられる。他方2013年度は、国際環境事例研究や英語による授業、留学生との交流など、専攻の国際的教育内容に惹かれて入学した者が増加したこと、指導教員と専攻の側で、学生の海外派遣に関するノウハウが蓄積され、派遣がスムーズになっ

たことが、評点回復の背景にあると推定される。

2013年度の評点の分布は、10が1名、9が4名、8が16名（最頻値）、7が4名、6が2名、5が5名、4が1名、1が1名である。評点の理由について、次の回答が得られた。

10（1名）：理由の回答なし

9（4名）：

自己の多角的観点からの見直しが可能であった点

自分の下準備不足だったため、スムーズにいかない点もあった。しかし、それ以外は自分にとってとても良い経験になりました。

この留学プログラムは私にとって素晴らしい経験となった。一方で、留学先との手続きなどをもっと学生にやらせることで、留学で得られる自律性や積極性が得られると思う。

8（16名）

初めての海外留学の割にはうまくいったから

海外プログラム全体としては、素晴らしい経験、体験ができた。しかしアンケートにも記したとおり資金援助額については増額を望みたい為。

プログラムがどこまでの範疇をさすのかわかりませんが、海外経験のない自分にとっては、次はうまくやれるという思いがあるので自分への期待をこめてこの点数にしました。

自分の研究に関連する勉強はできなかったが、異文化に触れることができ貴重な体験ができたから

私自身の考え方をよりグローバルにするような経験ができました。多くの現地学生と交流し、イスラムの文化に触れ、もっと広い視野で物事を捉えようと思えるようになったからです。しかし、現地で実験を行い、その結果が期待以下のものだったので、その点でマイナスさせて頂きました。

研究分野の理解が深まった 海外経験ができた

概ね満足しているため

異国の地での生活やコミュニケーションを通して、非常に有意義な体験となった。訪問国の学生と協力して現地実測した経験は大変ためになった。しかし、自分の研究のことだけを考えるならば、海外に行く必要性はなかった。もちろん全体で考えるならば良かった。このプログラムは普段行っている研究とは切り離して考えるべきだと思う。普段の研究は、時間的・設備的にも海外では進まない。

大変充実した時間を過ごすことが出来たので。

様々な海外体験ができ、大いに満足、感謝しているが、学生同士の交流の幅が大きく持てなかったことが残念であったため。

語学能力の向上は不十分な結果に終わってしまったが、他国の文化に触れることによって自身の意識も大きく変化したため。

7 (4名)

準備に時間を割くことが困難であった。

異文化理解とともに日本についてより知ることができた。また、自分の語学力ではまだまだだという事実を知ることができたので、今後の学習に役立てたいという意欲が湧いた。

研究がうまくいったとは言い難いが、異文化に触れて価値観を拓ける、語学(英語)を習得するという目標は達成した。

国際的な視点を身につけるには良いカリキュラムではあるが、狙いを英語力の向上とすることを強調するのは少し違和感を覚える。

6 (2名)

留学自体は、貴重な経験になったが、研究に活かせるような経験が少なかった。海外での研究という目線では非常に良い経験でしたが、語学学習という視点では不十分であるため。

5 (5名)

日本人がほとんどいなかったのが不安に思うことが多々あったから。

何を意図したプログラムか明確ではなかった

海外の研究室を訪問することは今後おそらくないと思うので非常に良い経験となりました。しかし、経済的支援が少なくほぼ全てを自分で負担することになったのでそれを改めて欲しいです。

4 (1名)、1 (1名) については、理由の回答なし。

⑥ キャリア形成における海外短期派遣体験の活用 (の可能性)

長期的な効果を予測するために、自分のキャリア形成における海外短期派遣体験の活用 (の可能性) を聞いたところ、次のような回答が得られた。就職活動で役立つ、海外に行く心理的ハードルが下がった、英語など語学学習の動機付けが上がった、海外での仕事に挑戦してみたい、長期留学や海外共同研究に活かしたいなどの積極的回答が多く見られる。

<2013 年度>

国際的視野を広げることができた。

国際的な視野は広がった。これまでは就職は国内限定しか考えられなかったが、海外で仕事をする機会があるなら是非挑戦してみたいと考えるようになった。

就職活動で、経験の有無を問われることがある。

海外で働く際に異文化の人と円滑にコミュニケーションできるようになったので、この経験を仕事で活かしたいです。

海外出張の際に役に立つ可能性があると思います。

将来、海外で活躍するために就職活動では前面に押していく。

この経験で、海外で働くチャンスのある場に、次のステップとしたいと考えるようになりました。

今は特になし

ショートビジットを通して自身の視野が広がり、また海外での勤務も機会があれば行いたいと感じた。

自分の中での、海外に行くことへのハードルが下がった。旅行や仕事でも機会があれば、海外に行こうと思うようになった。

これからの就職活動において、今回の経験について話すことができる。

海外に積極的に飛び出すきっかけづくりとなった。

博士課程進学希望であるため、今回の体験を通して、海外の研究者達とも連携をはかりながら研究を行いたいと考えています。

<2012 年度>

就職で海外も視野に入れるようになった

特になし。

現時点ではわからないが、今回訪問した国への興味が増した。

国際交流に魅力を感じる事ができたので、さらなるコミュニケーション能力向上のために語学留学に行きたいと考え始めている。

このプログラムをキャリア形成のためとするならば、もう少し受け入れ先の大学との連携をしっかりとしたほうが良いと感じる。国際的な理解は深められたが、得られたものとしてはそれくらいで、いい体験だったと言えるくらいである。

発展途上国の現状を少し学べたのは、自分にとってプラスになった。

今後海外勤務等で役に立つと思われる

異文化に触れることへのキャリアの広さは無限大だと思います。

海外での仕事で活用する機会があるかもしれません。

多くの日本企業はアジアで広く活躍しているので、学生時代に中国に短期留学できたことは今後自分の強みにもなるし、友好関係が問題となっている中国に対する異文化理解を深められたことは将来的に活かしていけると思う。

訪問国の文化は深く知ることができ視野が広がった。就職活動でも話すことができる。

英語学習モチベーションの向上。

大いにあると思う。視野が広がったし、異文化で生活することの大変さが理解できた。

<2011 年度>

私の訪問国は中国であるが、隣国であること、さらには著しい経済成長を遂げていることから、今後ますます我が国にとっての重要なパートナーとなることは言うまでもない。今回のショートビジット体験から得られた人脈を基に、中国との共同研究に発展させていきたい。

ビジネスにおいて海外へ行く機会があるかも知れないため、この海外経験は役に立つと思います。少なくとも、海外へ行くことに対する躊躇といったハードルは低くなった気がします。

就職活動において海外赴任のある企業も視野に入れていきます。

海外で活躍できる技術者になりたいと思うようになった。

将来は海外で働きたいと思いました。

今後、海外での留学やインターンシップ、業務などを考えているが、その上で短いながらも初めて体験した英語圏での生活と研究活動は今後の学習のためのモチベーションとなると思う。

就職、キャリアアップ、語学力向上

博士課程での海外調査へ向けたプレ調査という位置付けである。

2011 年度にタイに派遣された修士学生の K 君は、国際環境事例研究のレポートに、体験の成果を次のように記載している（原文のまま）。

Firstly, I can think about Japan and myself from outside in Thailand. It was for the first time that I went abroad. I had before fixed idea that foreign students in university can speak English well and have high intelligence and so on. When I was in Japan, I was busy to take class and do homework and read research paper. In fact, I did not have time to consider various things unhurriedly. (中略)
I learn many things. I have a very good experience in Chiang Mai. Also, I meet many people having different thinking. I think my action in the future is very important. When I come back Japan, I try to improve English and continue speak English studying in visiting in Thailand. In the future, I want to work in the world through this overseas education.

K 君は、就職活動において、自分の力が存分に発揮できる中堅企業を選択し、入社前から同社のタイのプロジェクトに参画し、2013 年の入社後も海外赴任を希望し、入社 1 年目にして中国支所の責任者に抜擢された。

また、2012年度の国際事例研究発表会を聞いたインドネシア人学生は、次のような感想を寄せている。日本人学生が、外国人との英語によるコミュニケーションに自信を持ち、帰国後も留学生などと積極的に会話をするようになった様子が窺える（原文のまま）。

I was so interested in the presentations not only because all of them was talking more about various cultures and the experience in dealing with them, but also because I could understand how Indonesia as my country looks like from the eyes of a foreigner. (中略) The other points are English speaking capability and self-confidence in communication. I was so surprised when some presenters told the story how their English ability improved after experiencing JASSO trip. Especially when they mentioned how their short visit improve their English because of the improvement of their self-confidence in communicating in English with foreigners. Their relatively higher self-confidence than prior-to-the trip, influence their frequency in communicating with foreigners even when they have come back to Japan.

3. 教員に対する調査結果

国際環境事例研究の必修化は、専攻にとって大きな決断であった。このため、2012年度から、学生を派遣した指導教員に対しても質問紙調査を行い、専攻会議においても、学生へのオンライン調査結果を基に議論が重ねられた。2012年度に学生を派遣した指導教員からは、主に次のような意見が寄せられた。

<学生に対する効果>

- ・入学当初と比較すると、英語のプレゼン能力が飛躍的に向上した。
- ・留学の経験により、海外滞在に対する不安や忌避感が大きく減少したと思われる。
- ・英語能力の向上：海外留学時だけでなく、留学前の準備期間と帰国後も含めて英語を学ぶ契機となった。特に積極的に勉強している学生の英語能力は相当程度向上している。
- ・帰国後間もないため、明確な効果が確認できるのは今後だと思うが、本人たちの話を聞くと、国際性やコミュニケーションの重要性に関して身をもって実感したようである。
- ・英語によるコミュニケーションについて：帰国後は留学生とのコミュニケーションもスムーズになっている。これは英語力のアップよりも、引っ込み思案でなくなったという面が大きいと思う。また 英会話の全部を聞き取れなくても“何となくわかる”ようになったようだ。その結果、黙ってしまわないで“取りえず何かを言う”

という習慣が身に付いたと思われる。

- ・日本の現状についての理解：旅行者としてではなく生活者として他国の社会に触れた結果、日本がいかにか豊かで便利な社会であるかを認識したように思われる。例えば、Internet 環境、上下水道や交通機関などのインフラの有難さがよく話題に出ている。この経験から、日本社会に対する感謝と貢献の念が生まれればよいと思っている。

<研究室に与えた効果>

- ・研究室にいる外国人留学生に英語で積極的に話すようになった。
- ・英語による研究室ゼミでの討論が活発になった。また、帰国後の話題が国際的になり、学生間の雑談の質が向上した。
- ・英語を学ぶ自主ゼミの開催：学生同士で英語を学ぶゼミを実施し継続して勉強している。
- ・他の学生でも、博士課程への進学後、または修士修了後に、海外への留学や就職を志望する学生が出てきた。海外短期派遣の影響もあるのではと考えている。

<実施上の課題>

- ・学生の経済的負担が厳しい場合の対応。
- ・留学先での研究が、修士研究に直結させづらい場合での対応。
- ・学生を派遣すると、受け入れも行わなければならない、教員の負担も多くなる。
- ・派遣学生を受け入れてくれる海外パートナーを作ろうとする動機付けになりますので、専攻の国際化の観点で良い制度だと思います。教員の負担は相応にありますが、これは仕方なしです。
- ・JASSO の支援を受けても、学生の金銭的な負担が生じるため、現時点では、必修とするのは困難であると考えている。
- ・JASSO に関しては、学生の入学前に派遣先や期間を決める必要があるが、学生の意思や研究テーマを踏まえた決定ができないため、困難な面があると感じている。

上記のように、学生の積極性や国際性の向上、研究室における英語使用の活発化や英語の自主学習などの効果は認めつつも、実施上の課題として、学生の経済的負担、学生を受け入れてもらう海外の研究者に対する「借り」を返すための教員負担の増大、海外での研究が修士研究に関連付けられない場合の対応などが指摘されている。特に専攻会議で議論になったのは、奨学金が全員に支給されない中で必修化は適当か、という点であった。検討会が何度も開催され、2013 年度以降の実施方法について、「母国以外の国を対象として、環境に関わる研究あるいは調査等を実施させ、学生の国際性およびコミュニケーション能力の向上を図る」ものであれば、海外研修と国内での調査研究のいずれかを選択できること、また、海外研修の場合の最低期間を、2 週間

から1週間に引き下げることとなった。ただし、国内での調査研究は、専攻が指定する課題に関する母国以外の希望する国を対象とする調査研究とされ、進捗状況を英語で発表させ、学生間の英語でのディスカッションを実施させる内容となっており、2013年度は、留学生も含め、国内での調査研究を選択した学生はいなかった。

もう1つ議論となったのは、リスク管理である。海外旅行保険には派遣学生全員が加入しているものの、2012年度には中国で反日運動が勃発し、すでに派遣されていた学生の中には、大学のキャンパス外での行動が大きく制約された者も多かった。JASSO 奨学金には間接経費は付いていないため、派遣に伴うアレンジやリスク管理を行う教職員の負担は大きくなる。また、JASSO 奨学金は申請ベースであり、継続の保証はない。このような中で、国際環境事例研究を継続するためには、他の財源やリソースの検討も必要である。

4. 海外短期派遣を通じた日本人学生のグローバル化効果と大学の国際化への示唆

以上、東京工業大学環境理工学創造専攻における、海外短期派遣を通じた日本人学生への教育効果と実施上の課題について、学生へのオンライン調査結果、教員への質問紙調査結果等に基づいて紹介した。

教育効果については、海外短期派遣によって、国際的視野の拡大、異文化理解の深化、人的ネットワークの拡大（外国人の友人の増加）の効果が認められ、海外への心理的ハードルが下がり、海外での仕事や長期留学・インターンシップに関心を持ち始めた者も多い。派遣直後「期待したほど英語力を向上できなかった」と回答した学生も、外国人留学生との積極的な会話や自主ゼミなどによって英語学習を継続する傾向が見られ、国際環境事例研究や修士論文の発表会では、全員が英語で発表して合格点を得ている。海外短期派遣は、グローバル人材として求められる「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を深め、「語学力・コミュニケーション能力」向上の動機付けを強める契機となったと考えられる。また「主体性・積極性、チャレンジ精神」についても、学生調査のコメントや帰国後の行動変容の観察から、多くの学生において高まったと推定される。

2012年度以降の国際環境事例研究の必修化、専門科目の英語化、修士論文の英語による発表の義務化は、日本人学生にとって大きなチャレンジであり、2011年度のプログラム評価点の低下やコメントは、彼らの反応の一端を示している。しかし、このように国際化を促進する教育環境を整えたことは、多様な国からの外国人留学生の増加と相まって、積極派のみならず、消極派、浮動層を含めた学生が、グローバル人材として求められる資質を磨く制度的要因として働いたと考えられる。

他大学に先駆けて海外短期派遣を必修化し、授業を英語化したことは、学生の就職

と海外に関心がある学生の募集にも、プラスの効果があったと考えられる。例えば2013年度の教員調査では、海外短期派遣が専攻に与えた影響として次の回答が寄せられている。

- ・就職活動でリクルーターに説明する際のアピールになるのではないか。
- ・就職活動の時に話すネタができたのは良いかと思えます。
- ・専攻説明会の際に短期派遣の必修化について説明することで海外に関心のある学生を集めるのに役立っている。
- ・大学院入試の受験志望者が、受験するかどうかを検討する時の重要な要素のひとつになっていると思われる。

他方、2012年度の国際環境事例研究の必修化に当たっては、学生の経費負担、特にJASSO奨学金受給者と非受給者間の公平性の担保について長時間の議論が交わされ、学生の経費や教員負担などの問題は、2013年度の教員調査でも、次のように指摘されている。

- ・欧州諸国に行く場合には自己負担が大きくなる。
- ・相手の大学にかなり負担をお願いすることになるので、その穴埋めも含めかなり大変です。若手の先生にとってはかなり辛いのではないかと思います。

学生の海外派遣のマネジメントやリスク管理を含めた時間や労力をいかに捻出するかも大きな課題である。浦田（2012）は、有本ら（2008）による「大学教授職国際調査」を基に、1992年から2007年にかけて、日本の大学教員の週当たりの教育時間が19.7時間から20.5時間に、管理運営時間が6.0時間から7.6時間に増加したのに対し、研究時間が21.7時間から16.7時間に減少したことを示している。日本の大学教員が、研究においても国際的成果を求められる中、海外短期派遣を通じたグローバル人材の育成を持続的に発展させるためには、海外派遣のマネジメントやリスク管理を含めた体制づくりへの支援の検討が重要になると考えられる。

政府における海外短期派遣予算の拡大から3年、国際環境事例研究も開始して3年である。学生調査の結果や教職員の意見を聞きながら、今後も改善を続けていく必要がある。企業との連携を強化し、学生への奨学金、海外での見学や共同研究、インターンシップなどを含めた協力関係を構築することも、課題解決策の1つに挙げられよう。

<参考文献>

有本章編著（2008）『変貌する日本の大学教授職』玉川大学出版部

浦田広朗（2012）「改革期における大学教員の仕事時間配分—1992年と2007年の比較分析」、大学・学校づくり研究、第4号、pp.69-83

- 岡田昭人 (2012) 「新しい国際教育プログラムの展望と課題—東京外国語大学ショート・ビジットプログラム (SV) を事例として」、広島大学国際センター紀要、第 2 号、pp.69-83
- グローバル人材推進育成会議 (2012) 「グローバル人材育成戦略」
- 近藤高明 (2006) 「留学志向の三層と留学支援のありかた—積極派・消極派・浮動層のプロフィールを手がかりに—」『京都大学における国際交流の現状と可能性—第 2 回アンケート調査報告書』京都大学国際交流センター、pp.43-56
- 首相官邸 (2013) 「日本再興戦略」
(http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf (2013 年 6 月 20 日閲覧))
- 中本進一・比奈地康晴 (2006) 「埼玉大学 STEPS の分析(上)—国際教育交流論の視点から—」、埼玉大学留学生センター紀要：留学生教育、第 8 号、pp.53-66
- 蘭信三 (2006) 「分析結果の概要—国際交流の現状と課題」『京都大学における国際交流の現状と可能性—第 2 回アンケート調査報告書』京都大学国際交流センター、pp.6-9
- UNESCO (2012) *UNESCO Global Education Digest 2012: Comparing Educational Statistics in the World*, Montreal: UNESCO Institute of Statistics.